

造りの環境は厳しくなったという。それでも、「蔵人一同、人生にうるおいを」をモットーに酒造りに励んでいる。これからも地酒の灯を消さないよう頑張っていきたい」と話した。

「言葉の壁で安全を妥協させない」

多言語通訳同乗による技能教習が本格化



鳥取県内からは同蔵元を含み4蔵元が出品し、(南)高田酒造場(岩美郡岩美町)の「瑞泉」、千代むすび酒造(境港市)の「千代むすび」、大谷酒造(東伯郡琴浦町)の「鷹勇」が入賞した。



実際の技能教習の様子

えられるのが同乗の強み」と話す。
難しいのが専門用語だ。「フエード現象」や「ペーパーロック現象」といった教本固有の技術用語は、日常会話レベルの日本語では到底カバーできない。通訳スタッフ自身が事前に日本の交通法規と専門用語を習得した上で教習に臨んでいる点も、この取り組みの本質的な強みといえる。

加えて重要なのが、交通文化の違いへの対応だ。例えばベトナムでは、存在を知らせるためにクラクションを日常的に使用するが、日本では緊急時以外の使用は避けるのが原則。

「教習車に同乗しているからこそ、その場で文化の違いを伝え、日本の運転感覚を自然に身につけてもらえる」とアイン氏は話す。ホーチミン出身の同氏は、今年1月に米子へ移住。海と大山に囲まれた環境と当地の温かい人柄を気に入り、「この米子から、もっと多くの外国人が安心して活躍できるよう支えたい」と意欲を語った。

今後の展開について木村部長は、物流現場からの引き合いが特に多い「フォークリフト教習」の多言語化を近々実現したいと説明する。山陰近隣では特定技能生の受け入れ自体がまだ途上段階にあるが、年間約800人の普通免許卒業生に占める外国人教習生の割合が着実に高まる時代を視野に、受け入れ体制の整備を進めている。

言葉の壁を取り除くだけでなく、日本の交通文化を正しく伝え、外国人材の即戦力を足元から支える同校の挑戦は、山陰のグローバル化を牽引する地域インフラとして、その存在感を増しそうだ。

政府が特定技能の対象に「自動車運送業」を追加したことで、山陰でも、外国人材の運転免許取得ニーズが急増している。ただ、現場の最大の障壁は「言葉の壁」。咄嗟の指示や危険予知のニュアンスが伝わらなければ、重大事故に直結しかねない。

こうした課題に正面から応えるべく、学校法人柳心学園(米子市旗ヶ崎二一五一一、大野奈穂子理事長)が運営する米子自動車学校が今年から本格化させたのが、通訳スタッフが教習車の後部座席に同乗する「多言語通訳同乗技能教習」だ。

外国人関連事業部の木村貴正部長によると通訳スタッフはベトナム出身2名、インドネシア出身1名の計3名体制。ベトナム語・インドネシア語・英語に対応。入社後、カリキュラムの整備を経て4月から本格的な教

習をスタートしたという。

現在は平均で月に3名の外国人教習生が在籍。5月はベトナム人2名のほか、日本語がほぼ話せないオーストラリア人1名には英語が堪能なインドネシア人スタッフが柔軟に対応した。

「奥様が日本人でご本人は日本語がほぼ話せない方。こういう対応ができるのも、今の体制の強みです」と木村部長。通訳スタッフの同乗サービスは、外国人を雇用する企業・本人双方が気軽に活用できる体制が整っており、即戦力化を目指す現場から高い関心を集めている。

現場で通訳を担うベトナム人スタッフ、ドアン・ティ・ニユー・アイン氏は「日本に長く住んでいる教習生でも、指導員の話すスピードが速いと聞き取れないことも。その場で補足し、ベトナム語に訳してすぐ伝